「しょ、しょうがねえだろ！　寝ぼけてたし、外にでかいヤツがいてさあ。一気にエンジンかかってよっしゃああって飛び出しちまったら思わず蹴倒したんだよー」

ご主人とスワロが住んでいるのは、郊外の廃墟街。特にご主人がいるのは、フェンスの外に近くて、危険な囚人と呼ばれる怪物が忍び込みやすいので他に不法占拠する人があまりいなくて住みやすい（ご主人曰く）ところです。なのでたまに襲われるので応戦するのも大切です。でも、壊していいとは言ってない。

「真っ二つに折れるとはな。あー、接着剤でくっつかねえかなあ」

そんなんでくっつくわけないでしょ！

ご主人のばか！　ばか！

「んじゃあ、カーテンで。季節もいいしー、なんか覗いてくるやつとかいねえし、いいんじゃねえ？」

ダメに決まってるでしょ。ご主人、デリカシーが皆無です。

こういう時は、こうむてん、呼ばなきゃ。

「でも金ねえし、廃墟街にくるカタギの工務店なんざあいねえって。大体、他の隠れ家たくさんあるし捨ててもいい……なんだよ、ここお気に入りなのか？　さてはスーパーが近いからだな。お使いの時、楽なんだろ」

その言い方なんかちょっと腹立つ。

スワロが睨むとご主人は、むーと悩んでため息をつくのです。

「わかったって。同じ扉拾ってきて修理するからよー」

廃墟街にはたくさんの棲家だったタテモノがあります。元々集合住宅のつもりで建てたらしいですが、色々あって放置されたってご主人が言ってました。ということで素材はたくさんあります。

「この扉でいいかなー。でも、いざってなると飾り付けたくなるなあ」

面倒くさがりですが、ご主人、やり始めると意外と凝り性なのです。変な方向にスイッチが入りました。

「んー、しまうまみてえなゼブラ柄とかオシャレじゃね？　それか、乱暴なヤカラが煽られて入ってきそうな煽り属性あるステッカーめっちゃ貼るのもいいかも。なんかのホイホイみたいになって俺が楽しい。え？　嫌？　じゃあ、スワロが好きそうな感じにドピンクに塗りたくってふぁんしーにしてやろうか！　あー、前衛的で可愛いじゃねえか！　俺、すげえセンスいいな。センス良すぎて自分が怖い！」

本当、ご主人、あたまおかしいな！

結局、ご主人を説得して穏当な木目調にしてもらうことにして、スワロはやっと一安心です

（ご主人はちょっと不満そうでしたが）けれど。

ご主人の作業中、スワロ、扉で一つ思い出したことがありました。

このハイキョのずっと下、地下室にふるいふるい秘密の扉が一つあるのです。

その扉はご主人の生体認証でしか開けられないので、スワロでもめったに入ることはありません。たまに「今日はお前も連れて行ってやるよ」とご主人は言って連れて行ってくれて、その時にだけいけるのです。

開けると狭い部屋がひとつ。ベッドと机とクローゼットしかない部屋です。

ご主人はそこでくつろぐだけで取り立てて何もしません。

そんなのご主人だけですよ。

ご主人と一緒にしないでほしいです。が、そんな結議をする間もなく頭に帽子を被せられました。帰ってきて「じゃあ散歩しようぜ。いつもと違う部屋にするかな。ついでに呆れてるかもしれねえぞ」

新物食いはご主人なのになー。

そんなふうに呆れますが、スワロも、ご主人の言うとおりで纏ですが、スワロもかなり新しい扉を開けるの、ちょっと楽しみになるのでした。

お買い物にきていただき扉が自動で開きました。目動ドア便利ですね。

スワロは戦闘用アンドロイドです。が、お昼寝してしまったご主人の代わりに当番いろい物だってするんですよ。本大変ですが、お買い物にくると、レジの奥様たちに「スワロちゃんえらいわね」って言ってもらえるのでちょっと嬉しいです。

それにしても。扉っていいですね。

いろんな人口出口。新しい世界に踏み込める扉もあるみたいですね。ご主人もそうおっしゃいました。そういうの、詩的で良いなとスワロは思うのです。

しかし。そんな風にご買い物でら帰ってきたときに、その扉のことを、スワロは悦びとともに、その扉が壊れてるーー

部屋の扉が壊れてるーー

なぜ？　なにがおこった？